

鬼の岩の伝説



昔も昔、附野の高壺山にたくさんの鬼が住んでおつての一。大将の赤鬼は、ごっぼう力が強うて、北浦一帯はおろか遠くの方まで力をのばし、いばっちょってなあ。村人は、たいそうこまっちゃった。



田やら畑を荒らすは、ニワトリや牛を盗むは、漁師の家を荒らしたりお酒を取ってきては、どんちゃん騒ぎをする始末の一。

気にいらんことがあると暴れ回るので、みんな、「さわらぬ神にたたりなし」ちゅうての一、びくびくして、こもうなっちゃったのじゃ。

そのころ海士ヶ瀬をへだてて、附野の真向かいにあたる瀬崎の光明山のふもとのしょうあん寺の

小間使いに、お夏ちゃんというてな、年ごろの気立てがやさしゅうて、親孝行者で、そのうえ島小町と言いはやされる程の娘がおつたのじゃ。



時おり瀬崎に潮くみに来る可憐なお夏ちゃんの姿を大将の赤鬼が見そめてからちゅうもの、寝ちゃあ夢、起きちゃあうつつ、どねえかしてめえめんの女房にしたあ思いが、日増しに強うなって、もうこらえきれんようになってしもうた。

そんで、かっさらってこうと考えてみたが、光明山には、瀬戸の守り神である弁財天様が鎮座してござるので、どねえすることもできんで困っ

よった。



ある日、海を渡ってきて、弁財天様の前に出て、「どうか、私にお夏ちゃんをください。」と、お願いしたところ、「それほどまでに欲しがらなからくてやるが、それには条件がある。夏至の日に、一晩のうちに海士ヶ瀬を埋め尽くしたら、おまえの願いを聞いてやる。だが、それができんにゃあ、お夏ちゃんをやることはできんぞ。そのうえ、何でも私の言いつけにしたがわんにゃあならんが、それでよいのか。」と言われると、赤鬼はおどり上がって喜んで、附野に帰るなり手下に言いつけて、あっちからこっちから大きな岩石を高壺山いっばいに運ばせて準備を整え、手ぐすね引いて約束の日を、今か今かと待ちよった。



ところで、弁財天様は、よい声でなくニワトリをしょうなこ集められて、「よいか、おまえたちは、私が右の手をあげたら、いつでも夜明けを告げる声をあげるのじゃぞ。」と、お言いつけになったのじゃ。



約束の夏至の日は来た。響灘にまっ赤なお日さんが沈むのを合図に、鬼たちはいっせいに準備しておいた岩石を取っちゃあ投げ、ちぎっちゃあ投げ、雨あられと手当たり次第にごんごん海士ヶ瀬にほうりこんだ。瀬は、だんだん浅くなり、願望がかなえられるかに見え始めた。殺気だった鬼どものかけ声と、岩石の落ちる音で、てんで耳がつぶれそうじゃった。



弁財天様は、じっと見つめちょられて、ちょうど今だと、右手をさっとあげられると、待ちかまえちゃった何千何百羽のニワトリが、一度に夜明けを告げる声を上げた。



赤鬼は、まっ赤になってじだんだ踏んで悔しがり、その足音はてんで大きな地震でもおきたようじゃった。

悔しいあまりに、へりにあったとほうもない大きな岩を、ちょうど団子を握るようにわしづかみにして、目よりも高こう差し上げて、「えいっ。」と、かけ声とともに、角島めがけて飛ばした。



岩は空を飛んで百雷が一ぺんに落ちるような音を立て、黒瀬の海辺に落ちた。島の者は、夜明けを待ってびくびくしながら近寄ってみると、大きな大きな鬼の指あとが深々とついておったので、こりゃあ鬼の化身じゃちゆうて、親しんできたのじゃ。赤鬼は、弁財天様との約束を守ったので、北浦一帯に平和が戻ってきたちゆうことじゃ。本当に、ありがたいことじゃ。

